

氏 名 植田 めぐ美

学位(専攻分野) 博士(文学)

学位記番号 総研大甲第 2632 号

学位授与の日付 2026 年 3 月 24 日

学位授与の要件 文化科学研究科 地域文化学専攻
学位規則第6条第1項該当

学位論文題目 16 世紀ブラジルにおけるトゥピ語によるキリスト教の宣教

論文審査委員 主 査 八木 百合子
人類文化研究コース 准教授
松本 雄一
人類文化研究コース 准教授
韓 敏
人類文化研究コース 教授
金子 亜美
東京大学 大学院総合文化研究科 准教授

博士論文の要旨

氏 名：植田 めぐ美

論文題目：16世紀ブラジルにおけるトゥピ語によるキリスト教の宣教

本論文は、16世紀ブラジルにおいて、先住民言語のトゥピ語でなされたキリスト教の宣教の歴史的プロセスを再構成することを目的とする。特に、「カライーバ (caraíba)」という語彙に焦点を当てる。もともとこの語彙は、先住民の言い伝えに現れる人物や、その人物が持つ超自然的な力を得るために先住民が行っていた儀式を指しており、宣教を担ったイエズス会宣教師からは罪とみなされた。しかし、宣教師がトゥピ語で作成した教理問答書では、「カライーバ」に「キリスト教徒」や「キリスト教的聖性」の意味が与えられ、この語彙は非キリスト教的意味とキリスト教的意味を含んだ両義的なものとなった。ゆえに、本論文では、なぜこのような両義性が生じるに至ったかを明らかにしてゆく。

なお、本論文では、キリスト教の概念を先住民言語で表す行為を「翻訳」とするが、これを、単にある言語から他の言語へ置き換える行為ではなく、キリスト教を伝えるために先住民言語をつくり直す、つまり、「宣教の言語」が創作されてゆく過程と捉え、その過程には、翻訳に関わった多様な人々の経験が絡み合っていたとみなす。この過程を検討するために、ヨーロッパ言語史料に基づく歴史的プロセスの再構成と先住民言語史料に基づく言語分析を合わせて行う。

第1章では、16世紀ブラジルの歴史的背景を示すために、ヨーロッパ人が接触した先住民の言語、社会、宗教について、そして、ブラジルを領有したポルトガルによる植民地政策と、先住民をキリスト教へ改宗する事業を担ったイエズス会の宣教活動の概要について述べた。特に、「パジェ」という存在と、「宣教村」というイエズス会の施設に注目した。パジェは先住民の間で影響力があり、「カライモニャンガ」という儀式を先導した。この儀式では主に、社会的地位の獲得や死生観と関係する敵と戦争をする慣習がパジェにより語られた。宣教活動を担ったイエズス会はパジェや戦争を先住民から排除するため、ブラジル独自の施設である「宣教村」を創設した。この施設は、先住民の労働力を巡り宣教師と植民者が争う原因をもたらした。他方、教理教育や先住民言語の習得を介して先住民と宣教師が接触・交渉する場でもあった。

第2章では、イエズス会の言語政策について検討した。これには、宣教師がトゥピ語を習得するための文法書の作成や、当時「リングア」と呼ばれていた通訳の養成が含まれていた。ブラジルでは、ヨーロッパ出身の会士が文法書でトゥピ語を学んでも十分なレベルには達しなかったため、ブラジルで生まれ育ち先住民言語を良く知る者が「リングア」として活動していた。彼らは、パジェの話し方を模倣するなど、先住民の慣習を宣教に取り入れていたので、ローマのイエズス会本部から疑いの目を向けられていた。しかし、宣教地では常に通訳が不足し、トゥピ語の教理問答書や秘跡の手引きなどは彼らの協力で作成されたため、ブラジルで生まれ育った「リングア」は常に重視され、彼らが通訳として持っていたパジェに類似した特徴もイエズス会から排除されず、後継の通訳に引き継がれて

いった。

第3章では、トゥピ語の教理問答書や秘跡の手引きが作成された背景、テキストの特徴、先住民によるテキストの内容の習得と実践について検討した。ここで扱うトゥピ語のテキストは、宣教師が先住民にキリスト教を教えるために用いられた。他方、先住民は宣教師が教えたテキストの内容を口頭で繰り返し、それに従って典礼や礼拝行進に参加していたので、先住民もテキストの内容の実践者だった。トゥピ語の教理問答書や秘跡の手引きは、ヨーロッパで流通していたテキストの形態に従っている部分もあるが、先住民の文化的要素を適用してキリスト教の概念を表現するなど独自性もみられ、ゆえに、先住民言語でのキリスト教の表現には矛盾が生じた。この翻訳にみられる矛盾は次章以降でより詳しく検討された。

第4章では、トゥピ語の教理問答書や秘跡の手引きにおいて、イエズス会が採用した翻訳の方法について検討した。まず、翻訳の方法が模索された背景として、スペイン領アメリカと異なり、ブラジルでは翻訳に関する議論が活発化しなかったことを取り上げ、その要因として、イエズス会以外の修道会や世俗教会が言語政策に介入しなかったことを示した。次に、主要かつ翻訳が困難なキリスト教の教義である「信仰」、「崇拜」、「神」を取り上げ、これらがどのようにトゥピ語で表され、先住民は翻訳された表現にどのように対応したかを検討した。これらの概念は、先住民にとって重要な慣習に由来する語彙で表現されたので、先住民本来の意味とキリスト教の意味が即座に折り合わず、両義的となった。さらに、先住民はヨーロッパ人がもたらした疫病に直面していたが、彼らがトゥピ語に翻訳された「神」や「主の祈り」を疫病の解決手段として解釈した可能性を示した。

第5章では、「カライーバ」という語彙を取り上げ、本来は先住民の言い伝えに現れる人物やその人物が持つ力を得るために行われた儀式を指していた語彙に、なぜ「キリスト教徒」の意味が与えられ、この語彙から創作された「洗礼」に先住民がどのように対応したかを検討した。先住民は、ヨーロッパ人が生活に有用な鉄製品をもたらしたので、外来者を古くからの言い伝えに現れる「カライーバ」という人物とみなし、そこから「カライーバ＝キリスト教徒」という等式が定着していった。また、パジェと宣教師が先住民の気を引くために互いの言葉や行為を利用しながら争っていたことで、先住民は本来パジェに頼んでいた健康を洗礼や聖水を介して求めるようになり、「カライーバ」という語彙を用いたキリスト教の表現が両義的になった。

第6章では、「カライモニャンガ」という先住民の在来の儀式と、「聖性」という先住民の抵抗運動を取り上げた。「聖性」とは、植民地化やキリスト教化に反発した先住民が状況を転換させるために行った儀式であり、それは、在来の「カライモニャンガ」の中に反発したキリスト教の要素が取り込まれ、非キリスト教的要素とキリスト教的要素を含んだ両義的なものとなって現れた。ゆえに、この章では、「聖性」に混入したキリスト教の要素を先住民によるキリスト教解釈の反映とみなした上で、これらの要素が教理問答書や秘跡の手引きの中でどのようにトゥピ語で表され、なぜ先住民はキリスト教に対する抵抗運動にこれらを利用したのかを検討した。「聖性」の目的は、ヨーロッパ人の優位を反転させることであり、そこに利用された「教皇」、「聖像」、「洗礼」といったキリスト教の要素はその目的に達する力があると先住民にみなされ、その力こそが「カライーバ」であった。

本論文は、「宣教の言語」の創作から受容までの過程を検討することで、「カライーバ」

が先住民とヨーロッパ人が互いを解釈する鍵となっていたことを示した。また、「カライーバ」は、先住民の慣習、トゥピ語で表されたキリスト教の概念、先住民が起こした「聖性」という抵抗運動に現れたが、いずれのコンテクストにおいても共通して「現状を変える」という意味で用いられ、それぞれの状況に応じて「現状を変える」目的や対象が変化していった、との結論に達した。

Results of the Doctoral Thesis Defense

博士論文審査結果

Name in Full

氏 名 植田 めぐ美

T i t l e

論文題目 16 世紀ブラジルにおけるトゥピ語によるキリスト教の宣教

本論文は、16 世紀のポルトガル領ブラジルにおいて先住民言語のトゥピ語を使って行われたキリスト教の宣教について論じたものである。ブラジル管区のイエズス会の宣教活動に焦点をあて、ヨーロッパ人の宣教師がトゥピ語でキリスト教の諸概念をどのように翻訳し先住民に伝え、先住民がトゥピ語に翻訳されたそれらをどのように解釈し、いかに対応してきたのかという点について、先住民言語史料とヨーロッパ言語史料を丹念に整理・分析した歴史研究である。

本論文は序論に続く第 1 章から第 6 章までの本論、結論で構成されている。以下に概要を示す。

序論では、16 世紀のブラジルにおけるキリスト教の宣教プロセスを再構成するために、トゥピ語のテキストだけでなく、トゥピ語に訳されたキリスト教の語彙の通訳や翻訳をめぐる歴史的コンテクストに着目しながら分析することが示される。特に本論文では「翻訳」を言語の単なる置き換えではなく、キリスト教の概念を先住民言語で表す行為と位置づけ、宣教のなかで言語が創作されてゆくプロセスとして捉えるという分析視角を提示している。

第 1 章では、研究対象となる 16 世紀ブラジルの歴史的背景について記している。ブラジルでは植民地化やキリスト教化は当初沿岸部を中心に展開された。当時この地域の先住民は、トゥピ語が共通語になっていたほか、複数の村々に分散居住しており、食人や一夫多妻制、敵対する集団同士で戦争を繰り返すなどの慣習を持っていた。先住民の宣教を担ったイエズス会は、宣教科という独自の施設を創り先住民を集めて教を施すなど、宣教科を中心にした宣教活動の内容を説明している。

第 2 章では、イエズス会による言語政策として通訳の問題について検討している。宣教活動のなかでは当初、トゥピ語の解る植民者やブラジル育ちの者が通訳として重要な役割を担っていたが、イエズス会はトゥピ語の文法書を作成し、ヨーロッパ出身の宣教師の通訳養成を促した。しかし、宣教師の先住民言語習得は思うように進まず、当時活動していた宣教師に関する目録の検討からは、トゥピ語を運用できる宣教師の多くはブラジル育ちであった点を明らかにしている。

第 3 章では、トゥピ語の教理問答書とカテキズムの内容が検討される。16 世紀から 17 世紀初頭に書かれた異なる作者による手稿や刊本など、複数のテキストを参照し合うことで、それらのなかに加筆や修正以外にも、翻訳上の矛盾点がみられることを指摘している。この点について、次章以降では個別の事例を取り上げ、歴史的コンテクストに落とし込みながら詳しく検討している。

第 4 章では、翻訳にみられた矛盾点について、信仰、崇拜、神という先住民言語には存在しないキリスト教の概念を取り上げ考察している。事例の検討から、宣教師たちが先住民の理解を促すために、先住民の慣習に由来する語彙を派生させて造語を創作するなどした結果、先住民に由来する意味とキリスト教本来の意味とが折り合わずこれらの語彙に矛盾や両義性が生じていた点や、植民地の歴史的コンテクストによって、先住民たちの間ではこれらの語彙の解釈が宣教師の意図とは異なる形で伝わっていた可能性を指摘している。

第5章では、「カライーバ」というトゥピ語の語彙に焦点をあて、翻訳において生じた両義性について論じている。この語彙はもともと先住民の言い伝えに登場する人物を指していたが、宣教のプロセスにおいて「ヨーロッパ人」や「キリスト教徒」などの意味が付与されたことを明らかにしている。特に病気治療のコンテクストなどで、宣教師とパジェという超自然的な力を持った人物が先住民の関心を引くために、互いの言葉や行為を利用していたことが両義性を生む要因の一つにもなっていた点を指摘している。

第6章では、先住民の抵抗運動を取り上げ、翻訳をめぐって生じた両義性について検討している。キリスト教化に反発して先住民が起こしたこの抵抗運動は「聖性」と呼ばれたが、本質的にはパジェが行う在来の儀式と類似する要素を持っていた。先住民の先導者たちはそこにキリスト教に由来する用語を流用したり、キリスト教的な儀式の一部を取り込んだりしており、両者の文化的要素が入り混じった実践が展開されていたことを論じている。

結論部分では、本論文の分析の鍵となった「カライーバ」というトゥピ語の語彙がキリスト教化のプロセスにおいてキリスト教的意味と非キリスト教的意味を含んだ両義的なものに変化しながら、異なる歴史的コンテクストのなかで用いられてきた点を整理したうえで、語彙の翻訳や解釈をめぐると両義性がブラジルにおける先住民への宣教活動で生じた特徴の一つであったと結論付けている。

以上のように本論文は、難解なトゥピ語の史料を駆使して先住民言語によるキリスト教の宣教活動の実態を描き出した労作で、特に次の点が評価された。第一に、高度な言語運用能力を存分に活かして、ポルトガル語をはじめとするヨーロッパ言語史料だけでなく、トゥピ語の未刊行史料の精緻な分析を成し遂げた点である。トゥピ語によるキリスト教の表現については、ポルトガル語訳に依存せず自ら検討・分析したうえで日本語に翻訳しており、その史料的価値は高く評価された。第二に、宣教の過程におけるイエズス会士と先住民との間の相互作用の実態を描き出した点である。ヨーロッパ人が記した史料から先住民の声を読み取る方法を採用し、先住民の解釈・反応を明らかにすると同時に、イエズス会士も自らの枠組みで相手を捉え模倣した仕方について徹底的に検討している。先住民と宣教師の双方の反応やミメシスを同等の精密さをもって読み解くことに成功している。

一方いくつかの課題も指摘された。まず、トゥピ語史料の分析は評価に値するものの、ヨーロッパ言語史料に用いられている言葉の意図や概念、史料を記録したヨーロッパ側の背景など史料批判の上で重要な問題が捨象されている点である。また、本論文は歴史研究ではあるが、先行研究のレビューや分析過程で言及した人類学や言語人類学、エスノヒストリーなど隣接分野の研究と本論文との関係が未整理なため、研究の位置づけを明確に打ち出すことができていない点が挙げられる。

しかし、これらの点は本論文の学術的な意義や価値を損なうものではなく、今後の研究において解決と発展が期待されるものである。以上の理由から、本論文は博士の学位授与に値すると審査委員全員一致で判断した。